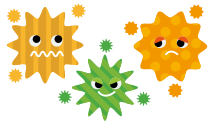
＼事例から学ぶ／

感染症対策



［執筆者］
堀　成美
ほり なるみ
国立国際医療研究センター 客員研究員
東京都港区感染症専門アドバイザー
神奈川大学法学部、東京女子医科大学看護短期大学卒業。2009年国立感染症研究所実地疫学専門家コース（FETP）修了。同年聖路加国際大学助教、2013年より国際医療研究センター感染症対策専門職、2015年より国際診療部医療コーディネーター併任。2018年8月より現職。

第11回　あれもこれも感染症予防

ちょうど１年前に世界に広がり始めた新しいコロナウイルスの影響により、世界中で手洗いをする人やマスクをつける人が増えました。もともと日本ではインフルエンザや花粉症の流行時期を中心に一般の人々がマスクをつける光景は珍しくなく、また医療機関では日常的に使用していました。マスクは高額･品不足で入手できない、蛇口をひねってもきれいな水が出てこない国もある中、日本は本当に恵まれているのだなあと感じます。

◇◇◇

その日本では、これ以上子どもたちの学びの機会が失われないように、また経済活動を停滞させないように、感染対策をしつつ活動を広げていくという取り組みが行われています。そのため、「他にやれそうなことはないでしょうか」という質問が増えています。

感染症のリスクを下げる方法は大きく２つあります。一つは手洗いのような直接的な方法です。もう一つは、リスクが生じる原因となっている背景や要素､つまり環境や仕組みに働き掛ける方法です。

◇◇◇

新型コロナに罹った人のデータがたくさん集まってきてわかったことは、重症になる人とならない人がいる、ということです。重症化のリスクについては、遺伝的なことなど現在研究が進められていることもありますが、既にわかっている身近なものでは、タバコを吸っている（吸っていた）、肥満、管理されていない高血圧や糖尿病などがあります。

感染症の対策は地味なものが多いですが、病気になった時に苦しまないようにと願い、今まで以上に働き掛けをしていきたいと私自身が思っている部分です。

◇◇◇

感染症になる人はゼロにはなりませんが、それが周囲の人に広がらないようにすることが目標ですので、同時期に狭い空間にたくさんの人がいなくていいようにすることも工夫の一つです。これまでにも結核や風疹などの感染症が、留学生や技能実習生の寮で広がった事例があります。

これから建物を設計したり、多くの人が生活をする受け入れ場所を準備する人たちには、見た目やコストだけでなく、共同生活の中で感染症が起きた時に、緊急避難的に対策が取れるような工夫などもあらかじめ練っておいていただくことが大切です。

「ここに窓があったらなあ」「トイレのここに水道をつけておけばよかった」「やはり個室にすべきだった」と、いろいろな嘆きを聞いています。今後新しいことを計画する際には、バリアフリーや地震・火事発生時の備えをするように、「体調が悪い人がいたら」「感染症が流行したら」についてもぜひ考えてみてください。

家の中での感染予防（5つの工夫）

- 他の人の食べ残しを食べないようにしましょう。
- みんなで一緒に使うものは、使用後によく洗いましょう。
- 直接口をつけるものの共有は避けましょう。
- 家に帰ったら手を洗いましょう。
- 換気をしましょう。

東京都港区の家庭内感染を予防するためのリーフレットより抜粋。
ダウンロードは以下のURL、
https://www.city.minato.tokyo.jp/kouhou/documents/leaflet.pdf　またはこちらから➡